

自主シンポジウム 15

保育者—子ども間の愛着測定と保育臨床

企画者・司会者 立元 真（宮崎大学・教育文化学部）
 話題提供者 遠藤利彦（九州大学・人間環境学研究科）
 金子龍太郎（龍谷大学・社会学部）
 田爪宏二（山口芸術短期大学）
 西山 修（福山市立短期大学）
 立元 真（宮崎大学・教育文化学部）
 指定討論者 白石敏行（宮城教育大学・教育学部）
 湯地由美（広島市立基町幼稚園）

【企画要旨】

（立元 真）

愛着(Attachment)の概念は、Harlowの実験などの比較行動学の視点を取り入れながら、主に精神分析学の領域で発達してきた。この愛着の概念は、今や、保育者養成のための発達心理学の教科書の中で必ず取り扱われる内容となっている。これらの教科書の中では、比較的古いものでハーロウの代理母の実験やボウルビイの愛着の発達段階を、また比較的新しいものではエインズワースのストレンジシチュエーション法による愛着の個人差の測定などのトピックが取り扱われている。しかしながら、これらだけでは、現実の保育臨床上の問題を解決するための知識としては必ずしも十分なものではない。

さらに、新しい視点として挙げておかねばならないものに保育者と子ども間の関係性がある。この視点は、保育における保育者の2つの役割から支持される。

愛着対象者として 乳児院の保育者は、担当の子どもにとっては重要な愛着対象者となる。また、保育所や幼稚園の保育者は（特に入園当初において）、愛着対象者の代理的な存在となり、この保育者との間での十分な信頼関係を伴う愛着関係をもてることが、子どもが園内で安心して生活し、探索行動や社会的相互作用を行っていくための重要なポイントとなる。この働きは、入園時のみならず、母子間の愛着関係になんらかの問題が生じているときに、場合によっては緊急避難的に子どもの安定感・信頼感を維持する効果をもつ場合もある。

保育臨床家として さらに保育者の重要な働きとして、保育臨床家として、母子間の愛着関係に問題が生じている場合に、最も身近で専門的な知識を持つアドバイザーとして、母子関係を修正する役割が求められるようになってきている。このような場合、保育者と子どもの関わりが良好でなければ、適切な相互作用のモデルを示すことができず、また、子どもについての保育者の認知がゆがんでしまうこともある。

つまり、愛着対象者として、また、保育臨床家としての2つの側面をあわせもつ保育者がその役割を果たしていくためには、保育者—子ども間の関係性の客観的な測定が重要な鍵となるのである。

これまで、我々は、子どもと保育者の間の関係性の重要さには気づきながらも、具体的な測定や、それに基づいた保育臨床を行ってこなかった。本シンポジウムでは、愛着の基礎概念や乳児院や幼稚園での保育事例とともに、まだ試行的ではあるが、先駆的な愛着関係の測定の試みを紹介し、保育者—子ども間の愛着関係の測定の重要性を訴えとともに、より実践的で有用な測定を行い、より効果的で積極的な保育臨床を行っていくための方策を論じあう機会としたい。

1. 乳幼児保育現場における愛着の測定

遠藤利彦

まず、保育の現場で活用すべき愛着の基礎概念、またQソート法(Waters & Dean, 1995)などの愛着の具体的な測定の方法を示す。

母子間の愛着関係の測定に比べれば、保育

者—子ども間の愛着関係の測定を試みる研究は、それほど多くはなされていないが、現在までに報告されている保育者—子ども間の愛着関係の先行研究の知見を紹介する。

2. 乳児院の子どもの愛着

金子龍太郎

乳児院の子どもたちは様々な理由で入所してくるが、その理由が身体的虐待やニグレクトなどの過激なものでもなくとも、早期に母親と間での分離を経験するという点で、愛着の発達に関してはハイリスクである。

「育担当者制」や「担当者と一緒に移動（主に1歳位までの子どもが生活する居室から子どもが移動する際に、担当者も一緒に移動する）」、また「かつて生活していた居室への里帰り」などの、保育者—子ども間の愛着関係の構築を意図した保育実践の事例を紹介する。

3. 乳児院における愛着の測定

田爪宏二

広島県・愛知県・宮崎県・鹿児島県の計6つの乳児院に所属する子どもとその担当養育者の間の愛着関係の測定を試みた研究を紹介する。この測定の試みは、AQSを質問紙化して保育者に回答を求め、乳児院内の生活環境の中での測定を試みたものである。この尺度では、『保育者がそばにいることを前提としたやや不安定な愛着』、『保育者に対する信頼感に基づき育ちつつあSecureな愛着』、『特定の保育者に固定されない関係性に基づく活動性』の程度をそれぞれ測定できる。

4. 幼稚園・保育所の子どもの愛着と保育者

立元 真

多くの子どもが幼稚園や保育所に入園する3歳前後は、Bowlbyによる愛着の発達段階では最終段階の「目標修正的な協調性形成」の時期への移行期に相当する。発達の個人差を前提にすれば、母子関係に特に大きな問題がなくても、入園時の母子分離に多少の難を示す子どもが含まれて当然の時期でもある。このような子どもに対して、母親との接触を継

続させながら徐々に園内での保育者との関係を形作っていった事例、および、母親の妊娠をきっかけに人間関係上の問題が表面化し、保育者の働きかけをもとに問題を克服していった事例を紹介する。

5. 幼稚園・保育所における愛着の測定

西山 修

幼稚園及び保育所に在籍する子どもとその担当保育者との間の愛着関係の測定ツールを作成した研究を紹介する。この尺度は、AQSをベースとして質問紙化し、標準化を行ったものである。この尺度では、『保育者に対する信頼・良好な関係(Security)』の程度、『保育者に対する依存性(Dependency)』、『活動性・社会性(Sociability)』を測定することができる。また、『保育者に対する信頼・良好な関係(Security)』の尺度の測定結果は、子どもの加齢に伴って変化する性質を持つものであることが示されている。

6. 討論

白石敏行・湯地由美

白石敏行氏は保育者養成、及び、幼児心理学の研究者としての立場から、また、湯地由美氏は現役の保育者として現場の視点からの討論を行う。その内容としては、

1. よりよい測定の方法の開発に向けての技術的な問題、紹介されたツールで測定される内容の臨床的価値。
2. 現場の保育者がもつ経験知と測定したデータをどう結びつけるか、また、
3. 測定に基づいて具体的にどのような対処が考えられるか、
4. 保育者—子ども間、また、母子間の愛着関係を念頭に置いて保育を行う保育者を養成するためになにが必要であるのか、
5. 保育者に対する愛着行動の発達的变化をどうとりあつかうか、

などの問題が議論の争点となることが予想される。